

主な記事

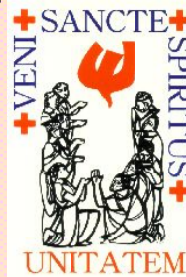
2面 ひと、小教区紹介
典礼奉仕のために

3面 若い力、震災支援

4面 医療のともしび、新刊書籍
平和行事
教区スケジュール

カトリック 高松教区報

2011年9月18日(第144号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報:tk-koho@mxl.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/



11月23日高松に集まろう

さあ！教区宣教大会へ

生き生きとした教会めざす

二〇〇八年度から三年をかけて準備を進めてきた高松教区宣教大会(教区シノドス)がいよいよ十一月に迫った。一昨年は教区現状認識、昨年はそれを受けての養成、そしていよいよ、そこから積み上げてきた私たち小教区、地区における将来の信仰の在り方を表明する時が来た。

高松教区宣教大会は11月23日(水・勤労感謝の日)桜町司教座聖堂、四国カトリック会館及び桜町聖母幼稚園を会場に、9時45分受付、10時15分開会と決まった。

この宣教大会開催への道のりを振り返ってみよう

二〇〇四年の溝部司教着座は「教区の再生と一致」という大きな課題へ向けての出発点であった。以来、教区の歴史と現状を踏まえて対話を積み重ね、また教区運営の両輪ともいえる司祭評議会と宣教司牧評議会を立ち上げた。

「道」の問題についてはそれまでの経過を踏まえ、二〇〇八年夏に神学院閉鎖を決定し、翌年三月に神学院を廃校とし、用途変更を行って教区霊性センターとした。教会法及び国内法にも不備がないように努めた。これからどのような



司教 諭訪 榮治郎 司教

会の広がりが一気に見えてきました。教会は世界につながっている「普遍教会」を実感しているこの頃です。

そんな中で今、世界の教会に一つの動きが起こっています。来年、第十三回世界代表司教会議(シノドス)が計画されており、「新しい福音宣教」というテーマが討議されるのです。私たちが生きる世界は急速で驚異的な技術の発展、経済システムの変化や利権などに流されています。それは生きることの価値観に変化をもたらす、時にありとあらゆる苦しみと問題、紛争を生み出しています。生きる意味と希望はどこにあるのでしょうか。どのようにしたらイエスさまの福音が現代人の心に触れる事が出来るのでしょうか。

な教区、小教区を作ろうとするのかを問う時、神学院廃校に代わる青少年宣教司牧の活性化と召命問題への取り組みを見据える事としたのである。

二〇〇八年からは三年を掛けての教区宣教大会の準備初段階として、現状認識をテーマに教区民の集いの開催を計画した。しかし、新型インフルエンザの影響で中止となり、二〇〇九年一月三十日にそれに代わる教区・小教区代表者会議を行い、どんな教会を作りたいか等を(ピン・ボン)ホルのキャッチボールをしながら考えて来た。それをもう一段膨らませるためにピンボールが第二弾として投げられ、養成の年

司教叙階式から二ヶ月余りがたちました。最近各教区からまたバチカンから色々な手紙が入ります。教

世界中の教会が「新しい福音宣教」の姿を模索し始めています。イエス様の心が日本人々々にどのように触れ、拠り所となるのでしょうか。以前から問われてきた大きな問題です。そんな中で「教区宣教大会」が行われようとしています。「どんな教会になりたいのか」と同時に並行の動きとなりました。教会(使徒)は見えない神の心をこの世で表す役目である

「新しい福音宣教」のかたちを探そう

福音宣教をイエス様から頂いています。これが教会の根本使命です。

また二十五年前の福音宣教推進全国会議(ナイス)の結論も基本課題となります。すなわち「教会」とは信仰、共同体、現実の三本柱を調和させた時「私の教会」を脱皮して「キリストの教会」になれると言うものでした。三本柱のバランスが欠けると変てこな教会になります。さらに司祭、修道者、信徒が交わり、協力して教会(キリストの体)をつ

を歩み始めた。自分たちで何が出来るかを考え分ち合いながら、二〇一〇年各地区における「教区民の集い」でその考えを表明し確認してきた。

今秋十一月に宣教大会が開かれるが、これまでの養成が花咲くように、準備が進められている。実施日時場所については色々と変更を重ねて上記のように決定した。

これまでの歩みを大切に

高松教区では溝部司教着座以来七年の間、再生と一致に取り組んで来た。司祭・修道者・信徒が共に創るのが教会と言えるが、高松教区では尻すぼみになってしまった感もある。本教区は召命も途絶え他に頼ってしまっただけで、また教会組織を教会法に則って運営して行くという意識が薄かった。四年をかけて現在、司教の諮問機関としての司祭評議会、宣教司牧評議会と教区民の集いの開催のための両輪が育ってきた。今年が高松教区にとって画期的で大事な年になる。それは前向きに取り組んでいく宣教大会を以て刷新していく方向性を定めているからだ。これまでに多くの出来事があったが、それによって各個人の見方が変わってきているようでもある。

高松教区は小さく貧しい教区である。しかし貧しいからこそ出来ることもたくさんある。教区大会は現実を踏まえ協力して共に喜んで考え、作っていくための通達点となる。今、司祭だけでなく信徒と共に協力し話し合い、あるべき教区に向かって歩んでいる。組織を福音化し、

くるとの「協力宣教」という取り組みも教区の基本姿勢です。

私たちはこれを三年かけて取り組んでまいりました。十一月に行われる「教区宣教大会」はある意味で世界の教会と心を合わせた大会になるでしょう。それはどんな教会になりたいかと言う「結論を発表する大会」と言うよりは、「新しい福音宣教」への各地区の「道のり」を祈り合う集いだと思います。それは各小教区の目標より、「地区」の目標であると思えます。なぜなら「地区の絆」を大切に作り上げることによって、小教区間の協力関係が生まれるからです。これが「協力宣教」です。

世界の教会が「新しい福音宣教」を模索し始めた今、私たち高松教区も「普遍教会」と一緒に歩み探し続けましょう。社会に希望のメッセージである福音を色々な形で表していきたいでしょう。その基本となるのは信じる者一人ひとりの「イエス様との出会い」の体験です。大きな課題ですがこつこつと積み上げて参りましょう。

どう動かすかが大事だ。司教叙階式が間に入った関係で、表題の準備に若干の遅れが出ていることは否めないが、各地区は残りの期間内で積極的に準備を整えていく必要がある。

「宣教大会」開催に向けて

特に九月には直近の準備に入り、宣教大会へ向けて各地区は意識の高揚と具体的準備に向けて取り組んでいくことになる。準備への取り組みとはいうまでもなく、冊子「ともに喜びをもって生きよう」(日本カトリック司教団)の光に照らして、昨年地区大会で表明した「こんな教会になりたい」を見直していく作業のことである。そして、その過程を大事にしていくことである。

先回の地区大会で表明された「こんな教会になりたい」という小教区の表明を受けて、これからの地区としての在り方を、ただ単に、自分たちのなりたい教会というのではなく、「ともに喜びをもって生きよう」というNICEの精神に生かされた教会として、地域から求められ、また本当に生き生きとした教会を目指そうとして現在分かち合いが持たれている。基本的に教区が主導するのではなく、地区の主體的な在り方を各地区で探りながら進め、これが大きなうねりとなることを願っている。

宣教大会の準備には地元香川地区に多大な協力をお願いすることになるが他三地区にも綿密な協力と連携を取りつつ成功を祈りましょう。

新司祭評議員・新地区長についてのお知らせ

諭訪新司教着座により、諭訪司教は司祭評議会々長として以下の通り新しい司祭評議員と地区長を任命しましたのでお知らせいたします。(太字氏名評議員は地区長)

- 諭訪榮治郎司教(教区長)
- 教区職務上評議員
デシデリオ・カンバラ(司教総代理:香川地区長)
村上康助(会計担当)、西川康廣(事務局長)
- 司祭団選出評議員
ファン・マヌエル・ゴンサロ(愛媛地区長)
松永洋司、パウロ・セコ、土屋和彦
- 司教指名評議員
イルダラヤージ・アントニサミー(高知地区長)
乾盛夫(徳島地区長)
サンティアゴ・サイズ、レナト・フィリッピニ

はばたき

「アヴェ・マリアの祈り」が正式に確定したのは嬉しいことです。これは私達にとってとても大切な祈りです。若い頃、どのように生きるべきかを求めて教会を訪れた私は、この祈りを教えられた時、「今も死を迎える時も・」とは何とも不思議なお祈りだなあと違和感を覚えました。

しかし、この祈りをするたびに人生を死の側から観るといふ訓練をさせていたのだでしょう。祈るにつれ、年を経るにつれて、それが当然と思ひ、聖母にぜひお祈りして欲しいと思うようになりましたし、よき死を迎えるためにはよく生きなければと思えるようになりました。

両親や夫を看取る時も、この祈りをどれほど唱えたことでしょうか。死にゆく人にとってこの祈りがどれほど必要なものかを私は実感させていたきました。災害や事故で突如死を迎えた方々やご遺族のために、真摯な祈りをお捧げしなければと思ひます。彼らにとって死は多分思ひがけないことだったのでしょうか。

しかし、死を迎える前に、人生の最後の仕上げとなる老いや病い、孤独や絶望という誰もが避けては通れない感情も充分に味わい、自分の心にみがきかける勇気を持ちたいと思ひます。それは多分、この世での神さまからの最後の贈物になるのでしょうか。

神の母聖マリア、私たち罪人のために、今も死を迎える時も、お祈りください。
アーメン。

若い力



右から3番目が松下恵子さん

サンチャゴ巡礼～イエスさまが越えた道

中島町教会 松下恵子

私は、今回のWYDにサンチャゴ巡礼から参加しました。5日間、100kmに及び徒歩の旅は「信じられな～い！」の連続でした。準備不足だった私は2日目のRedondela～Pontevedraの道中で、体調を崩し歩けなくなりました。道ばたに座り込んで、みんなに追い越されていく中で、「日本に帰りたい！」と思いました。

そんな中、声をかけてくれた人がいて、その後シスター方にもお世話になり、現地スタッフの方に宿まで送迎していただきました。それからは、沢山の人の気遣っていただき、感謝の連続でした。特に、スペイン人スタッフの女性が、私がトイレへ行くとときなど、ずっと支えてくれたり、常に笑顔で接して下さったことが印象的でした。皆さんのおかげで、次の日から回復し、巡礼を続けることができました。途中、荷物を担

いでくださった神父様にも、感謝しています。

4日目のPortas～Padronの道中にて、私は一人の韓国人の女の子と仲良くなりました。彼女はあまり体が強くないのに、私を気遣ってくれ、その明るさには勇気づけられました。坂道などにさしかかると苦しいときは、「イエス様もこんな道越えたのかなあ」と話しながら励まし合いました。

今回の旅を通して、仲間の大切さ、自分の過去を肯定することで前に進めることなどを学びました。ただ、何を選び、行動していくかは自己責任であるため、これから重要なだろうな、と思っています。

最後になりましたが、高松教区、大阪教区の司教様、神父様、ブラザー、青年たちに深く御礼申し上げます。

巡礼を通して～多くの気づきと恵み

松山教会 寺尾由香里

まず今回の巡礼に参加できたことを感謝します。

Bコースでも全日程の参加が難しかった私のために、ブラザー八木が事務局に掛け合ってくださいました事で、参加出来ました。中途参加になりましたが参加することすら難しいと思っていた私にとっては出発前から大きな恵みでした。

途中からの参加だったのに班の人たちが温かく受け入れてくれたことがとても嬉しかったです。短い期間だったけど、分かち合いと一緒に食事をする事で交流を深める事が出来ました。

言葉の違いに不安があり自分から声をかけるということに勇気が必要でしたが、班の人たちに支えられて

少しはコミュニケーションをとることが出来ました。巡礼なのにそんな格好で？と思われるかもしれませんが、持参していたゆかたを着ている事で、外国の方から声を掛けてもらい会話のきっかけが出来ました。ゆかたに助けられました。世界中から人々が集まるので、宗教的な交わりだけでなく文化的な交流もいいものだなと思いました（その為には語学力が必要だとつくづく思いましたが…）。世界の人々を見て、文化や考え方がいろいろあるんだな、ということを感じました。でも、教皇ミサの時にはキリストに根ざしてというテーマのもと集まった青年達が同じ気持ちでミサに与る事が出来たのではないかと思います。100万人以上の人々が一つの場所に集まるといふことに感動しました。最後になりましたが、WYD参加にあたり教区から多大な支援を頂きました。本当にありがとうございます。この巡礼を通しての気づきや恵みを少しでも多くの人に伝えることができますように…。



会場にて 浴衣姿が寺尾さん



仙台司教座聖堂

高松教区（東日本大震災）サポートセンター[TSC]立ちあがる

高松教区サポートセンター[TSC]は7月9日の設立準備会を経て8月17日の第1回会議をもって活動を始めた。

センター長：谷口広海助祭、(大阪教会管区支援室長：諏訪榮治郎司教)
センター員：レナト・フィリップピニ神父(桜町)、田中正史神父(宇和島)
川上栄治神父(道後)
センター地区員：橋本正士・片山耕太郎(徳島)、兵頭俊介(愛媛)
須山二朗・六車寛行(香川)、林弥生(高知) 2011/9/1 現在



オールジャパン会議

3月11日に東北地方で起こった大地震は千年に1度のもと言われ、それが惹き起こした大津波によって数多くの人命と沿岸部の数々の都市のみならず、原子力発電所も破壊され、想像を絶する三重苦となる甚大な被害に見舞われた。復興復興には10年単位の時間を要すると言われる。その中で東北地方一帯を管轄するカトリック仙台教区も大きな被害を受けた。

この状況を受けて仙台教区は単なる原状回復を超えた「新しい創造(被災者の日常生活を取り戻すために)」という目標を打ち出し、時をおかず、緊急かつ現実的



惨状を留める志津川

な活動に乗り出すために仙台サポートセンターを立ち上げた。日本カトリック司教協議会も仙台教区と被災地域の支援に取り組むために「カトリック司教協議会東日本大震災復興支援室」を設置し、仙台教区が打ち出した「新しい創造」への力になるべく仙台教区の要請に応える司牧支援と地域支援という二本の支援の柱を基本に据えた。

その上でカトリック司教協議会は日本教会を長崎教会管区、大阪教会管区、東京教会管区の三つのグループに分け、それぞれが独自の立場で支援していくことを決定し、仙台教区が東北沿岸部の特に大きく被災した地域(自治体)と教会を支援するために、内陸部にある教会の司祭を沿岸部へ派遣する「新しい創造」に乗り出したことを受けて、そのため内陸部の司祭不在

になった教会に3教会管区から各2名、計6名の司祭を派遣する司牧支援(教会内部支援)を決定し実行している。

地域支援については基本的に長崎教会管区は岩手県、大阪教会管区は宮城県、東京教会管区は福島県を担当し、地元教会をベースに地域を支援をするという方針に従って動き始めている。これらの活動は管区独自の責任においての決定と活動となるが、勿論、仙台サポートセンターとの緊密な情報交換と連携の中での動きとなる。

また現在、東日本大震災復興支援のため、カトリック全教区と男女修道会そしてカリタスジャパンを網羅して情報の窓口となるオールジャパンネットが設置され、全教会での情報の共有と連携を図っている。そのオールジャパンネットが7月11日から2日間開催し



湾口から6kmにわたって破壊された大船渡の町を大船渡教会へ上る坂から見た光景

た現地仙台教区での会議と被災地視察に谷口広海助祭が参加した。誕生間もない当[TSC]高松教区サポートセンターは上記「仙台教区サポートセンター」、「カトリック司教協議会東日本大震災復興支援室」、「大阪教会管区(支援基地)」との連携のもと、オールジャパンネットを窓口として活動することになる。

[TSC]高松教区サポートセンターの性格と働き

- 性格
 - 高松教区の認可した委員会である。
 - 仙台教区サポートセンター(SDSC)の後方支援を行う。
 - 大阪教会管区との連携を大切に(協力)
 - 高松教区としての被災地へのサポートのあり方などを協議し、実行する。
 - TSCには四国各地区から2名が派遣され、定期的に協議し、教区と地区への情報を伝達する。地区はTSCの意向に沿って協力し救援活動にあたるが、地区独自の活動も認められる。

- 働き
 - サポートセンター事務局がまともに当たる。
 - 責任ある息の長いサポートのために常駐スタッフを確保する。
 - 現場への派遣、サポート、情報収集、情報発信
 - ボランティアの受け入れ、ミーティング、立案実行評価を祈りの中で行う。
 - 以上を確認し今後の活動の指針とした(教区ホームページ掲載)

現在大阪教会管区は支援基地として大船渡にベースを設けるための現地交渉を始めている。ここが立ち上がりとする[TSC]の現地基地ともなる。



塩釜教会ベースの青年ボランティアたち

「人間にとって一番大切なものは心育てることである」
一創立者 聖マリ・ウージェニーのこば—
学校法人 高松聖母被昇天学院
マリア幼稚園
香川県高松市多肥下町1 4番地3
TEL 087-867-7303

住環境福祉コーディネーターが家造り
福祉住環境リフォーム
高齢者・障害者に配慮したバリアフリーの住宅
福祉住環境リフォーム・新築・増改築工事・設計施工
有限会社リフォームオオタ
代表取締役 太田 修
〒763-0092 丸亀市川西町南449番地3 TEL (0877) 28-0881・FAX (0877) 28-0190
E-mail o-chandazo@theia.ocn.ne.jp URL http://www.reform-oota.co.jp

学校法人 **高松聖母幼稚園**
明るく達し、心豊かで調和のとれた
円満な人間性の基礎を育む
〒760-0017 香川県高松市番町2丁目4番31号
TEL: 087-851-2372
FAX: 087-823-0412
URL: http://www.seibogakuen.ed.jp/
E-mail: info@seibogakuen.ed.jp

